

発行 下諏訪町教育委員会  
編集 生涯学習  
編集委員会

〒393-8501  
長野県諏訪郡下諏訪町4611-40  
(下諏訪総合文化センター内)  
☎ 0266-27-1111(内線718)  
FAX 0266-28-0131  
E-mail=syougai@town.  
shimosuwa.lg.jp

### あの戦争に思いを馳せて

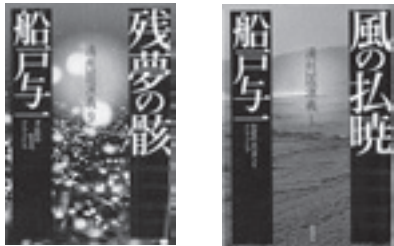
今年「戦後七十年」がいろいろな所で宣伝されている年で、八月に総理の談話も出された。

あの戦争は何だったのか。

それを考えるのに最適な本が、今年二月に刊行された。作者は船戸与一。彼は今年、ガンで亡くなったが、その船戸が命を削って十年がかりで完成させたのが『満州国演義』である。その第九卷(最終巻)「残夢の骸」がようやく今年出たのだ。ちなみに第一巻からの表題をあげると、

- 3 「群狼の舞」
- 4 「炎の回廊」
- 5 「灰塵の暦」
- 6 「大地の牙」
- 7 「雷の波濤」
- 8 「南冥の雫」
- 9 「残夢の骸」

東山田 林 芳男



### 『満州国演義』全9巻 船戸与一 著

となる。二〇〇七年に第一巻が刊行され、その惹句に  
「第二次世界大戦前夜。麻布・靈南坂の名家に生れながらも外交官、馬賊の長、陸軍士官、劇団員の早大生と立場を全く異なるに数島四兄弟が、それぞれの運命に導かれ満州の地に集うとき……中国と朝鮮、そして世界を巻き込む謀略が動き出そうとしていた。相克する四つの視点がつむぎだす著者渾身の満州クロニクル、いよいよ開幕！」とあり、この惹句にひかれて読み始めた。ただ一年に一冊くらいのペースで刊行されたため、なかなか先へ進まない。六巻目まで読んでとまっていた。  
今年になって、最終巻が刊行されたことを知り、にわかに意欲がわき、四月、町の図書館から第七巻を借りて読み、さらに第八巻を読了。続けて五月に第九巻を読了した。

とにかく圧倒された。物語は一九二八年から始まり、部分的に一九四六年まで描かれる。満州国の成立から崩壊まで、戦争また戦争の諸相が描かれる。四人(太郎・二郎・三郎・四郎という)の視点で多面的に表現される昭和初年の状況、その中で浮かび上がるのは、軍隊の暴走、政治家・メディアのたぐらめさ、巻きこまれ振り回される国民など人間模様である。  
一冊の本ではなくて、九冊の紹介になってしまった。なお、この八月から文庫本が出始めたようです。念のため。



※クロニクル：年代史

### 私のたいせつな本

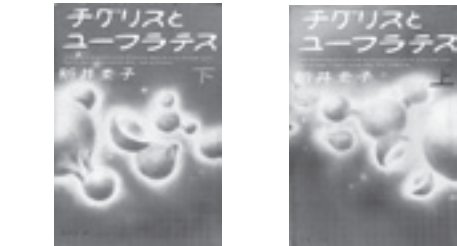


東赤砂 坂井 亜矢子

本が好きだ。活字が好きだ。出来ればずっとその世界に浸っていたい。現実はどうしても難しいが。亡き母が「本好きな子になってほしい」と小さい頃からたくさん本を与えてくれたからだろう。おかげで立派な活字中毒になった。

そんな活字中毒な私は、興味を惹けばあらゆるジャンルを、まさに「読み散らかして」きた。なので、一度読んだ本を再び読み返すという事はあまりないのだが、数少ない、何度も読み返す大切な本がある。  
それが新井素子『チグリスとユーフラテス』である。新井素

子は小学生の頃から読んできた好きな作家で、その独特の文体や世界観でいつでも私を魅了してきたが、この本ではいろいろな意味で打ちのめされた。今まで読んでいたあらゆる作品の中でも突出していた。ラストシーンの凄さときたら、涙が止まらなかつた。



### 『チグリスとユーフラテス』 新井 素子 著

『チグリスとユーフラテス』といっても、メソポタミア文明の話ではない。SFである。遠い未来、地球から宇宙へ飛び出し、移民した人類が辿った四世紀あまりの物語。ワンからイレブンまでおこなわれた移民事業のうちの九番目、惑星ナインがこの物語の舞台だ。  
その惑星ナイン「最後の子供」がルナ・E。彼女が、コールド・スリープ(冷凍睡眠)に入っていた人々を順に起こすところから物語は始まり、起こされた四人の女性たちによって、ナインの歴史が逆さ年代記のカタチで語られていく。  
惑星ナインでは、何らかの理由で生殖能力に欠ける者が続出し、移民から四〇〇年足らずで、子どもが生まれなくなってしまう。そのナインで、ルナ・Eは最後に生まれた子どもだった。それ故、大人になることが許されなかった。  
そんな「とこしえの童女」たる、惑星上にたった一人になったルナ(七十三歳)と、意に反

して突然目覚めさせられてしまう女性たち。ルナと彼女らの対話を通して、いろいろなことが見えてくる。  
あらゆる示唆がある。何度読み返しても、新しい発見があり、その度に感動がある。  
初めて読んだ十数年前から、現在に至っても。  
特に最後に起こされるレイディ・アカリがすごいのだ。何となく、アカリは惑星ナインの「女神」だから。普通の女は、たとえ仕立て上げられたとしても、女神になんかなれない。  
絶望しながらも、女神たりえた彼女の聡明さと姿勢と強さに、私はとても憧れる。自分には無いから。同じようになんか出来ないから。

